

火輪 かりん

鏞谷嚙矢 かぶらやこうし

大川の河岸に子供の死体が上がったのは、秋も深まり、鬢を揺らす風もめつきり寒くなった十一月初めの夕刻のことだった。

知らせをうけた岡つ引きの源七は、多田薬師の塀を横手に見ながら、大川橋をさして走りだした。

川向こうの諏訪町あたりの家の壁は、はや鮮やかな朱に染まり、地面に落ちる薄い影は、源七を急かせるように、長く短く形を変える。

河原に着いた時には、すでに大勢の野次馬が集まっていた。

皆、怖いもの見たさに、人の頭越しに伸びをして死体を覗き込み、口々に話をしている。

「こいつはひでえ」

「やりやがった奴は犬畜生に違えねえ……」

「ちよっとすまねえな」

野次馬をかき分けて前に進み出た源七は、死体の傍らに膝をついた。

莫塵の上に寝かされているのは、十一、二歳くらいの娘だった。子供ではなかった。だが大人でもなかった。少し乱れた裾から伸びるふくらはぎが、これから大人になろうとする優しいふくよかさを示している。

上物らしい着物から覗く喉元には、紐の跡らしきものが禍々しく残り、よほどの力で締め上げたものか喉骨は砕けていた。

傷を改めようと、うつぶせにすると、娘の首は嫌々をするように頼りなく揺れる。

源七は、神田長兵衛長屋、通称からくり長屋に住む岡つ引きだ。当年取つて三十五になるが、浅黒く引き締まった相貌のため、いまだ三十より上に見られたことはない。

「苦しかったかい。下手人はかならず挙げてみせるからな」

ぐらつく首をそつと地面に横たえて、源七は心でそう呟いた。

「源七、お前はどう見る」

一足早く駆けつけていた鉄蔵が、声をかけてきた。

「下手人は男でしょう。しかも臂力の凄まじく強い」

そう言つて、源七は、体を娘の体に覆い被さるようにして、野次馬の目を遮りつつ裾に手を差し入れ、取り出した指先を見た。

「しかし、悪戯をされてはいない」

「よしえ！お芳！」

その時、人垣をかき分けてそう叫びながら、半狂乱になった女が飛び込んできた。

傍らに、雄牛のような男が付き添っている。

女は、三十がらみで、贅沢な着物を身につけていた。

取り乱し、必死の形相をしてはいるが、そんな状態でなければ、切れ長の目に、さっと通った鼻筋から、たいそうな美形であることが知れる女だった。

女は、死体をひと目見るなり、絶句して後ろ向きに倒れかかった。

連れの男が慌てて抱きとめ、そっと地面に横たえる。

「おい」

源七は男に声を掛けた。

「うう」

男は唸るような声を出した。

表情は穏和だが、そばで見ると、恐ろしさを感じるほど巨大な体つき髭面の男だった。年は五十を過ぎているだろうか、髭に白いものが混じっている。

「お前、名前は何ていうんだ」

「うう……」

「返事が出来ねえのか……」

源七は、困ったような顔になった。

同業の岡っ引きとは違い、お上の威光を後ろだてに、強くでるとい事が

苦手な男なのだ

「源七親分」

ほんと弾けるように飛んできた声に振り返ると、六十はもうとうに越えたというふうで、髪も随分薄くなり、櫛くしすら止まりにくくなつてはいるものの、渋皮色しぶかわに日焼けした顔の真ん中で光る目の輝きが尋常じんじょうではない老婆が立っていた。

神田からくり長屋の名物婆さん、おろくだ。

「おろくさん。あんた、こいつを知っているのかい？」

独り暮らしのおろくは、煮炊きをしている最中に話を聞いて駆けつけたのか、荒い息を整えつつ、前掛けで手を拭きながら答える。

「この子はね、馬喰町に住んでいる言蔵っていう子だよ」

源七は苦笑いした。五十に近い大男を捕まえて「子」は無いと思うが、波乱の六十余年を生きてきたおろくにとって、源七を含めて、すべて世の男は知恵足らずの若造なのだろう。

「で、女のほうは？」

「すみえという、あの京津屋のおかみさんだよ」

「京津屋……」

先刻、初めて顔を見た時から、どこかで見た顔だと思っていたのだが、名を聞いて源七は思い出した。

「すると京津屋総五郎の……」

京津屋は代々ぶつぐ仏具しにせを扱う老舗しにせだった。

四代目、京津屋総五郎は、自身、著名な仏具職人で、仏師としても名を成し、近在のいくつもの仏像を彫り上げていた。

総五郎は、父である三代目、雨右衛門うらえもんの思惑で、幼いうちから仏具職人のもとに修行に出された。

大店おわたな、と言って良い商家の跡取りを、なぜ、職人の修行に出したかという

問いに、雨右衛門自身は、人から尋ねられるたびにこう答えていた。

「私どもは、仏具を商う商家でございます。仏具は仏様ほとけに関係した品物。おのずから他の商家の扱う品物とは性格を異ことにします。仏様に関する品物を手にするからには、いい加減な扱いをするわけにはまいりません。私自身は、幼少のおりに父辰五郎を亡くし、早くに店を継いだため叶かないませなんだが、せがれ総五郎には、職人の技に精通した主しゅになってほしかったのでございませ」

その方面の才能があったのか、あるいは父の願いをかなえようと一心いっしんに修行に打ち込んだためか、総五郎の腕はまたたくまに上達し、一流と呼ばれるようになった。

十七の年までに一通り仏具の技を会得した総五郎は、今度は、仏師の修行を始めたと言い出した。

それを聞いた雨右衛門は、折良く下谷の総分寺に寄贈する観音像を造るために京から江戸に出てきていた、菅井梁慶すがいりょうけいという、当代随一と呼び声の高い仏師を、三顧さんこの礼を尽くして京津屋に招き、総五郎に引き合わせた。

梁慶は気難しい男で、弟子はとらないという噂だったが、意外にも総五郎を気に入り、彼はこの師匠の下で五年間仏師としての修行を積んだ。

やがて、総五郎二十八歳の折、仏師としての彼の名が、にわかにわかに市中で高くなる事件が起こったのだった。

火事と喧嘩けんかは江戸の花、とよく言われるように、江戸市中では、半鐘の鳴らぬ日はないほど頻繁に、大小を問わぬ火事がある。

だが、火を制圧する方法は、当時、ほとんど見つけられていなかった。

火消にできることは、火が広がらぬようにまわりの家を潰し、倒すことぐらいしかない。龍吐水など小火にしか効果がない。

それゆえ、一度、火事の輪が市中に生まれると、輪の外への延焼は防げるが、輪の内側は、とにかく燃え切って、炭と煤になるのを待つしかなかった

のだ。

正しく「盗人は取り残しもするが、火事はすべてを持っていく」のである。

ところが、この年、材木町で火事があつた時、火元に近く、周りの家屋がすべて炭となったにも関わらず、ある大店だけが焼け残った。

駒形町でも諏訪町でも同様のことが起こった。

材木問屋、海鮮問屋という稼業の違いはあつたものの、どの店にも共通していたのは、そこに総五郎の作つた弥勒菩薩像がまつられていたということだった。

その仏像は、それら大店が総五郎が修行中に彫つた仏像の見事さに感じ入り、無理を言ってもらい受けて、庭に作つた祠に密かにまつっていたものだった。

以来、総五郎の弥勒菩薩は、火除菩薩として江戸中の人気を呼び、たちまちその腕当代随一と呼称されるようになった。

総五郎は、三十になり、四十の声を聞くようになって、父雨右衛門の描いた通りの道を歩み、他の職人と同じ棟割り長屋に起居し、決して実家には寄りつかず、その生活は質素堅実なものだった。

家に寄りつかないといっても、特に親と仲が悪いということではないらしく、仏師としての自分の腕が、旦那芸と呼ばれるのを嫌つてのことのようだった。

雨右衛門の思惑どおり、総五郎の高名のおかげで、店で商う様々な仏具は飛ぶように売れた。

総五郎、四十一歳の時、雨右衛門が病に倒れ、総五郎が店に戻つて後をとるようになった。

そのことを一番喜んだのは父雨右衛門であつたが、使用人の間でも総五郎に期待する声は高かつた。

店で働く者は、仏師としての総五郎の腕の良さを、いたるところで聞き及

んでいて、そのような高名な人物が、自分たちの旦那様になることを光榮に思ったのだった。

ところが、総五郎が稼業を継ぐと、日を経ずして使用人から、様々な不満が出始めた。

総五郎が厳格すぎるといふのだ。

仏師修行で骨身を削った総五郎にすれば、自分の下で働く使用人の働きぶりが常に物足りなく見えたのも無理はなかった。

使用人たちの生活が、日々安穩と大店で人生を浪費するだけに思えたのだ。もちろん、番頭、丁稚にも言い分はある。

人にはそれぞれ、分に応じた苦労がある。決して、御祓をして心を神仏に預け、我が身を一つの鑿として木片を仏に生まれ変わらせる修行のみが、「正しい」生き方ではないではないでしょう、と。

だが、雨右衛門によって、幼時から一心に修行を重ね、精進してきた総五郎には、それがわからないのだ。

月を重ねるにつれ、総五郎の使用人への当たり方は、さらにきつくなった。遠回しに嫌みなどを言うだけであったのが、しまいには、丁稚に対して自ら折檻するほどになった。

その姿を見て、雨右衛門は、長年の友である乾物商、肥後屋善兵衛を屋敷に呼び、涙を流しながら言った。

「善兵衛さん。私はせがれの育て方を誤った。職人の心をつかまぬ限り、この商売はうまくやっついていけないことを、父辰五郎から引き継いですぐに悟った私は、自分の苦勞を子供にさせじと、総五郎を幼きころより修行に励ませた。確かにせがれの腕は上がった。上がりはしたが、その間に、あれは人を使う世知をいっさい身につけはせなんだ」

「まあまあ、雨右衛門さん、そんなに悲観することはありませんよ。私の目から見ても、あれほど真っ直ぐな人は、なかなかいません。

最初から歪ゆがんでいるのを真っ直ぐにするのは骨でしょうが、総五郎さんは、堅すぎるだけです。もう少し時が経って、考え方に柔らかさが出れば、良い旦那様になられると思いますよ」

「ですが肥後屋さん。私には待つ時間があまりないのです」

卒中そつちゅうをわずらい、半身が不自由になった雨右衛門は、そう言って、おこりにかかったように震える右手を見た。

近頃では、左手も不自由になりつつあり、自分でも、もう長くないのは分かっていたのだ。

「わかりました」

そう言って肥後屋はこう続けた。総五郎さんが、ああも厳格なのは、若い青臭あおくさい考えが骨身に沁しみているからです。その青さを成熟した渋色しぶいろに変えるには、いずれの時代も方法は同じ……

「ど、どうするのです」

「なに、嫁御よめごをもらうんですよ。四十半ばになって、独り身ひとりみでいるのは体にも悪い」

こういうわけで、肥後屋の肝きんいりで、京津屋は嫁を迎えることになった。

しかし、実際は、それからが大変だった。

総五郎は、どの縁談も気に入らなかったのだ。

京津屋ほどの身代であれば、嫁になりたがるものは、引く手数多あまただったのだが、それも初めのうちのこと、来る縁談を片端かたはしから総五郎が断るうちに、名乗りを上げる者もいつしか少なくなっていく。

あまりに総五郎が選り好みをするものだから、あれは女性が嫌いなのだ、総五郎男色なんしよくの気けあり、という噂も流れ、ために縁談の数がさらに少なくなつたとも言われた。

半年ほどして、さすがの肥後屋も諦めあきらめかけた時、総五郎がふらりと出かけた浅草あさくさで見初みそめたのが、すみえだった。

すみえは絵師の娘だった。

絵師と言っても、高名な人物ではなく、戸田光彩という流れ絵師で、若い頃は、京大坂で修行をし、しばらく江戸で腰を落ち着けていたが、妻を亡くしてからは、再び江戸と上方を、方々で絵を描きつつ往復するという生活を送る漂泊の者だった。

流れ絵師では、もちろん満足な金子は得られるはずもなく、幼い頃からすみえが苦勞をしたことは想像に難くはない。

光彩は、娘をのぞむ相手が、高名な仏師で大店の若旦那であること知って、初めのうちは、身分が違くと縁談に反対をしたが、すぐに折れ、それからは、とんとん拍子に話が進み、今から十二年前の九月吉日に婚礼が行われた。

婚儀がおわると、半年を経ずして、雨右衛門が死に、総五郎が名実共に京津屋の主になった。

その後、一年ほどして娘が生まれ、芳恵と名付けられたのだった。

そして、今、その娘が、軀となって源七の前で横たわっている。

「ご内儀……おすみさん」

源七が声をかけて、肩を揺さぶると、すみえは意識を取り戻した。

心配そうに覗き込む言蔵を突き飛ばすようにして起きあがると、死体にとりすがり、唸るように泣き始める。

未だ若さの残る、美しい目鼻立ちを慟哭に引きつらせるすみえを、じっと見据えて源七は話しかけた。

「おかみさん。辛いだろうが、ちつとばかり辛抱して俺の言うことに答えてくれないか」

「……」

「この子は、お前の娘さんかい」

「そうで……ございます」

絞り出すようにそう言うなり、再びくずおれた女を守るように、言造が間に入って遮る。

「ううっ」

「な、何をする」

先刻から身を乗り出して、お内儀ないぎの顔を見つめていた、この界限かいわいでも嫌われ者で通っている居莫塵いもじんの弥太郎やたろうという岡っ引きが目をつり上げて怒鳴った。

まあまあ、と、間に入った源七にまで怒りが飛び火したらしく、

「おい、からくりの、ちつとばかし手柄が続いたからっていい気になるんじやねえぞ」

口角泡を飛ばしてのしり始める。

源七はそれを穏やかに遮って、

「いや、そういうことじゃねえ。ただ、言造は、うまくしゃべれねえようなんで……」

「そうだよ。そんなことも分からないのかい」

背後から、おろくの声が飛ぶ。

言造を知るらしい野次馬達も、次々に同意の叫びをあげた。

「黙りやがれ。見せ物じゃねえぞ」

弥太郎は、野次馬を怒鳴りつけたものの不機嫌に黙り込んだ。

「ど素人のくせによ……」

弥太郎の使いっ走りをしている、森助もりすけという二十歳前後の生意気盛りが、弥太郎の尻馬しりつまに乗って源七に向かって言い捨てる。

黙ってそれを聞き流した源七の目に、やれやれ、といった風に首を振る鉄蔵の姿が映った。

やがて、泣きやんだおすみから、鉄蔵が話を聞き始める。

娘は、昨日の夜から行方知れずになっており、今朝まで待って番屋に届

けを出しました、とおすみは答えた。

次いで、鉄蔵は娘の足取りを尋ねる。

先ほどまでの錯乱ぶりに比べれば、幾分落ち着いてはきたものの、瞳にしっかりとした光は無く、心ここにあらず、といった体のおすみは、それでも、昨日の日の暮れまでの、お芳の消息を語った。

——お芳は変わった娘で、同じ年頃の子供たちとは決して遊ぼうとせず、いつも独りで雲大寺裏の長屋付近をうろついでいました。

昨日も、昼過ぎから雲大寺に出かけていたのですが、あのあたりは、しっかりした人たちがすむ界限なので、別段心配もせずに遊びに行かせておりました。殺される理由がわかりません。あの子が殺されるはずがないんです。何度も言葉に詰まりながら、おすみはそう語った。

「雲大寺裏？」

「おい源七、あそこには確か……」

「へえ。あの長屋には、何人もの仏師が住んでいて、別名、ほとけ長屋と呼ばれておりやす」

「そうだったな。若い頃、総五郎が暮らしていたのもあの長屋のはずだ。お芳は父親を捜しておったのだろうか」

「どうぞでしょう」

五年前、つまりお芳が六歳の年に、京津屋総五郎は、忽然と行方をくらましているのだ。

「源七、行くか」

そう言うと鉄蔵は立ち上がり、着物の裾を翻して歩き出した。

「伊那六で一杯引っかけるか？」

すっかり暗くなった夜道を歩きながら、鉄蔵が言った。足下から冷えが這い登ってくるような寒気が通るには満ちている。

源七の足は、鉄蔵の供をして、馴れぬ町周りをしたために、鉛のように重かった。

早く長屋に帰って横になりたかったが、鉄蔵が話をしたそうにしているのを見て、

「へえ」

呟くように言っ、鉄蔵の後に従った。

伊那六は、伊那出身の六助という男がやっている飲み屋だ。

引っかけるといっても源七は下戸だ。酒は飲めない。

縄なわのれん暖簾をくぐって、切り株を使った椅子に腰をおろすと、顔なじみの六助

は、鉄蔵には酒、源七には甘酒を運んできた。伊那六の特色は、酒飲みと甘党の両方が自分の好みで嗜好を満足できるところにある。

「今日も冷えそうですね」

「うむ。冷えるだろうな」

源七のことばに鉄蔵が短く答える。

だが、言葉に出さなくとも思いは同じだった。ここ二月ほど、寒い日に限って火付けが起こっているのだ。

それも、質たちの悪い火付けで、その火事のお陰で、今までに二十人以上が焼け死んでいる。

犯人の名は知れていた。蟪蛄かまきりの居造いぞうという無宿者を頭とする一味だ。

居造一味の手口は単純で、押し込む商家から離れた場所ばやで小火を起こし、騒ぎが大きくなって警戒が緩んだところで仕事にかかるといふものだ。

一味の首領の名が知れたのは、何度目かの押し入った乾物問屋で、脅しつけられた番頭が、なまじ若い頃から柔術の心得があったばかりに、年寄りの冷や水で頭領らしき男に掴つかみかかったためであった。

その拍子に顔を覆った黒頭巾が外れ、下から若い男の顔が現れた。

十人前以上と言って良い男前だった。

だが、その秀麗な顔には、頭が上下に割れて見えるほどの傷が鼻の下に真一文字に刻みつけられていた。

結果的に、この蛮勇は、少々血の気が多い番頭が賊の放った抜き打ちにより袈裟懸けに浅手を負うという結果をもたらした。

が、この番頭は運が良かったのだ。もし居造が本気だったなら、確実にこの番頭は死んでいたはずだった。

特徴ある傷から蠅螂の居造の名を洗い出した岡っ引きたちは口々にそう言い合った。

居造は、それほどの使い手だった

「ところで源七」

甘酒を手にしたまま黙り込んだ源七に鉄蔵が話しかけてきた。

「へえ」

「弥太郎のこと……」

そう言つて、手酌で大振りの猪口に銚子から酒を注ぎ、

「気にせぬようにな。年季の浅いお前に手柄を立て続けに取られて奴なりに焦っておるのだ」

年季の浅い……そのとおりだった。

素人同然の自分に下手人を挙げられては、長年岡っ引きをやってきた弥太郎などが、快く思わないのもよく分かる。

「あつしは気にはしておりません」

鉄蔵は、そうか、と独りごち、少し間をおいて、

「で、近頃はどうじゃ」

「へえ」

「まだ思い出すか……」

「いえ、この頃は一向に……」

そう答えつつ源七は熱い甘酒を啜った。

前にも触れたが、源七は二年前に、妻みよを押し込みに殺されている。

その時以来、源七が当たり前と思っていた平穩無事な生活が一変した。

夜、眠ると、みよが目の前で刺される夢をみた。

昼間も幻に悩まされ、死人のようになって呆然と毎日を過ごした。

そんな折、下手人探索の腕を同心鴨居鉄蔵に見込まれて岡っ引きになったのだった。

これは異例のことと言ってよかった。

岡っ引き、正式には小者このもという、は、代々世襲されるのが常であったからだ。

理由はある。

数年前、神田に威を張った岡っ引き、梵天ぼんでんの吉次郎が、子分ともども賊に惨殺ざんざつされてから、直属の上司である鴨居鉄蔵に、一時、その縄張りが預けられていたのだ。

源七が、みよを殺した鼻はなびらの駒造こまぞう一味の居場所を、彼一流いちりゅうの方法で探り出し、お縄にさせてから、鉄蔵は、何度か、渋る源七を下小人探索に引っぱり出して、この男のやり方が確かなのを認めると、預かりおいた縄張りを源七に継がせたのだった。

鉄蔵の見るところ、源七の探索の仕方は変わってはいるものの、確かな根拠に基づくものだった。

まず、源七は手先てさきと呼ばれる、自分の手足となって情報を集める子分を持たなかった。

そのかわり町内にたむろする小僧を使う。

もちろん、小僧を聞き込みに戻らせるのではない。ただ事件が起きたあたりをうろつかせるだけだ。

何かが起きて間無まなしには、皆、顔をあわせれば、事件の話をするものだ。

そういう噂話を、いつでも、どこにで潜り込め、かつ疑われない小僧を使つて集めるのが源七のやり方だった。

源七が手先を持たないのには、また別に理由があるという者もいた。

当時の町奉行の仕組みは、次のようになっている。

まず、町奉行所があつて、その下に与力がいる。与力には同心が五人ほどつく。その同心の下に目明かし（岡っ引き）が三人ほどつき、目明かしは、通常、手先を十人は使う。

つまり、岡っ引きは、人を十人ばかり動かし得る立場の者でなければならぬわけだ。

だから、岡っ引きには任侠にんきやうの者が多かった。

奉行所から渡されるひと月に一分から一分二朱という、雀の涙のような金で、それだけの人数を養うことは到底不可能であるため、岡っ引きによつてや、裕福な大店に嫌がらせや寄付を強要する者も多くいた。

むろん、ほとんどの岡っ引きは副業を持っており、その収入でやりくりをしていたのだが、源七は、この金を惜しんで手先を持たないのだ、というのだ。

しかし、大部分の者は、源七が、腕に覚えたからくりの技による実入りで、手先の何人かは雇えるくらいの金を持っていることを知っており、彼が子分を持たなかったのは、単に気性きせうの問題だろうと思っていた。

実のところ、源七は足を棒にして歩き回る探索をしないため、それほど手先が必要ではないのだ。

小僧どもを使つて集めた情報で、犯人を見つけるのが源七のやり方だった。そういった型破りな源七のやり方を、やっかみ半分が悪く言う者は多かったが、目を見張る成果をあげることが多いため、今のところ表だった苦情が出ることは無かった。

鉄蔵から見て源七は変わり者だったが、源七から見ると変わっているのは鉄蔵の方だった。

同心と小者。

一応は主従の関係、ということになるのだろうが、鉄蔵は、代々続いた同心の家柄であるにも関わらず、他の同心とは違い、岡っ引きを下に見るということが無かった。

岡っ引きを「ともがき」として扱うのだ。

だから、こうして二人で酒を飲んでいても（源七は甘酒だが）、特に話をするという必要もない。源七が黙ると鉄蔵も黙る。

本来、主従であるべき二人が、向かい合って座ったまま、黙って別々の考え事をするのだ。

店で交わされる勢いの良い会話を、ぼんぼんと背中に受けながら、源七は火付け強盗の蟻螂の居造について考え始めた。

居造は、上州じょうしゅう田部郡の獵師の三男に生まれた。

三男であるが故に、また現金収入の乏しい田舎であるが故に、居造は、火薬惜しみをする父親から鉄砲を持たされることは無かった。

そのため、幼い頃から、我流で始めた鎌を利用した雑劍術ぞうけんじゅつに工夫を重ね、十五の年には、猪や熊など、大きな獲物で居造の鎌に倒されぬものは無かったという。

居造十七の年、江戸から薬問屋成駒屋なりこまやの大番頭が熊の胃の買い付けに出向いてきた。

一年に一度、江戸から上州に大番頭が出向き、薬効が高いとされている熊の胃（熊の肝臓）を買い付けるのが、成駒屋創業以来の習わしとなっていたのだ。

数日後、これも恒例の熊狩りに出向いた大番頭に向かって、手負いの熊が

襲いかかった。

恐ろしい勢いで突き掛かってくる獣に、もういけない、と誰もが思った瞬間、大番頭は突き飛ばされ、危うく難を逃れた。

あとには、居造が、独自に研ぎ出した奇怪な形の鎌を手立に立っていた。

恐れもせずに自分に向かって立つ人間を見て、一瞬、氣勢をそがれた熊は、すぐに威嚇する為に、後ろ足で立ち上がった。

その大きさ、七尺を越えている。

誰もが、熊の一薙ぎで居造が殺されることを確信した。

が、その刹那、熊の喉元に薄く赤い線がしみ出し、熊が威嚇の咆吼を上げると同時に、ぱつくりと喉に裂け目が出来て、爆発したように血が噴出し始めたのだった。

裂け目と口の二カ所から、違う音程の叫び声が、あたかも二重唱のように当たり一面に響きわたる。

永遠とも思える時間、熊は、半分首を切られた状態で叫び続け、やがて、ゆつくりと後ろに倒れ込んだ。

居合わせた人々は、そこに繰り広げられた不思議の術を目の当たりにした衝撃で、しばらくものも言えなかった。誰も、居造が鎌を使うところを見なかったのだ。

大番頭はいたく居造に感謝した。

さらに、居造と話をしてみても、雛には希な、と言ってよいほど、考え方や話し方もしっかりしていることが分かり、この三男の境遇を知るに及んで、番頭は居造に、江戸に来るように説いた。

勇躍、江戸に出てきた居造であったが、八百八町での居造の境遇は、彼が無想していたような幸福なものでは無かった……

「たいろく」

「へへ」

鉄蔵に話しかけられ、源七は我にかえって、あわてて返事をした。

「お前、今日の話はどう見た」

あの後、おすみを家に帰してから、源七は鉄蔵と二人で、雲大寺裏のほとけ長屋を訪ねたのだった。

差配さはいに案内させて、長屋の住人に話を聞いたところ、奇妙な点が浮かんできた。

この半月ばかり、お芳は、特に、なにをするというふうでもなく、長屋の前をうろついていたというのだ。

現在、ほとけ長屋にすむ住人、七人のうち、実際に仏師であるのは三人で、残りは表具師であったり畳屋であったりする。

三人の仏師に総五郎を知っているかと訪ねたところ、皆それぞれに、名前だけは知っている、と答えた。

三人の仏師はまだ若く、総五郎とは世代が違ったのだ。

「さすがに名前は知っているらしいな……」

「当たり前ですよ。ほら、これをご覧ください」

そう言って、差配が指さす先には、小さな板に文字が書かれたものが、長屋の壁に打ち付けられていた。

「これは？」

「総五郎さんの火除菩薩の御利益の話が書いてあるんです」

「なるほどの」

お芳のことは誰も知らなかった。

「お芳は、なぜ、ほとけ長屋に出かけていたのか……」

その後、二人は手分けして、京津屋とおすみが住む別宅に向かい、使用人や近隣の者に尋ねて回った。

お芳は、少し癩の強いところはあるものの、おとなしく利発な娘であった。

だが、ほとけ長屋に出かける理由はわからない。

ただ、番頭が言った次の言葉に、源七は妙にひっかかりを感じたのだった。

「普段は物静かなお嬢様なのでございますが、何かのきっかけで、癩かたが起きますと手が着けられません。それはもう、まるで火の輪が頭の中で回っているようなご様子なのでございます」

「源七。今度のころし、下手人は総五郎と考えられぬか」

黙ったままの源七に、鉄蔵が重ねてたずねる。

「どうぞでしょう。ただ、行方をくらましていた総五郎が、五年も経って突然江戸に戻ってきて娘のお芳を殺す、なんて話はありません」

「だがな」

最後の酒を猪口に移し、空になった銚子を畳に転がしながら、鉄蔵は続けた。

「そもそも、おすみが京津屋を出て、別宅に住むようになった理由を考えれば、あながちありえぬ話ではないと思うが、どうだ」

使用人との間に溝ができるにつれ、総五郎と、おすみとの間もうまういかなくなっていった。

総五郎とおすみは激しく口論しているのが何度か店の者に見られている。

やがて総五郎は酒を飲みだした。

始めは、嗜たしなむ程度であった酒の量は日増しに増え、日に半升はんしょう近くになった時に事件が起こったのだった。

五年前の十月二十日夜の刻、番屋に駆け込んできた女の姿を見て、詰めの役人はあつと驚いた。

女の鬢まげはほどけ、頭から血を流し、形の良い唇あじから顎あごに駆けて、白い血の

糸を引いていたからだ。

名を尋ねると京津屋の内儀だという。

京津屋では、毎年、神無月かんなづき二十日に、奉公人に休みをとらせるのが慣例で、その夜は、家族三人で過ごしていたところ、亭主である総五郎と些細なことで諍いが生じ、おすみは木槌で殴打されるに及んで、殺されると思って逃げたのだ。

夫婦喧嘩は犬も喰わぬ。しかし、おすみの傷が尋常でないのと、そのあまりに亭主を恐れる様子に唯ならぬものを感じて、役人が京津屋に駆けつけてみると、すでに総五郎の姿はなかった。

不思議だったのは、一番藏の中からきな臭いにおいがするため、扉を開けてみると、彫りかけの弥勒菩薩が半分燃えたまま水をかけられ、湿った蒸気を吹き上げていたことだ。

その後、総五郎は行方知れずになった。

調べてみると金庫にあった三十両が無くなっていた。

状況から考えて、妻に怪我を負わせ、番屋に駆け込まれたのを知った総五郎は、そのことが、人の口に上るのを恐れて金子きんす三十両を手に、上方にでも向かったものと思われた。

「恥というものに敏感な人でしたから」

おすみの言葉に、皆領うなずいた。

「彫りかけの仏像を燃やし、やりかけの仕事にふんぎりをつけて出ていかれたのでございましょう」店の者も口々にそう言った。

表向き、心配する声も無いでは無かったが、陰では「せいせいした」という声も多かったのだ。

その後、一番藏を締め切って、おすみは別宅に移った。

総五郎は嫌っていたが、雨右衛門が丁稚から育てあげた子飼いの番頭がよく働いたために、店の全てを番頭に任せて夜も店を空けることができたのだ。

以来、五年が経つ。

「確かに総五郎はおすみを怨んでいるかもしれませんが。しかし、女房が気に入らないからといって実の娘を殺すもんでしょるか」

「うむ。狙うなら、おすみが先だというのだな。それも道理だ」

鉄蔵がそう言って、二人はまた黙り込んだ。

先ほどまでやかましく酒をあおっていた職人風の連中が店を出ると、突然、店内は眠りについたように静かになった。

「……」

「……」

源七と鉄蔵は、知らぬまに耳をすましていた。

半鐘の音は聞こえない。

お互い、それに気づいて苦笑する。

「困ったものじゃな」

「寒い夜は、一晩中、半鐘が気にかかります」

居造一味の火付けと押し込みの探索は、下手人の名が挙がっているのに、なかなか埒らちがあかなかつた。

火盗改めのほか、同心、岡っ引きが総動員で探ってはいるのだが、一向に尻尾がつかめない。

目を追うに連れ、江戸の住人の不安も高まってきている。

なかなか下手人を挙げることでできない奉行を、町人ですらこき下ろす風潮が広まっていた。

源七は考える。

押し込みもさることながら、問題は、火付けの方なのだ。

押し込み自体は、いずれも鮮やかな手際で、逆らった番頭のように怪我をするものはいても、死人が出ることはなかった。

火付けの方も、居造一味が盗みを始めた二た月前は、そのいずれもが小火程度で消えるように工夫がしてあった。

家の前に積まれた樽や枯れ木を積んだ大人車など、火勢は強いが広がる恐れのないものに火が放たれていたのだ。

だが、半月前から様子が違ってきた。

普請中の家の木っ端や、空き家などに火がかけられ、それらは、折からの風に乗って、たちまち大火となって江戸の町に広まったのだ。

当然、人々に与える不安は尋常ではなく、近頃の、江戸の挨拶は、『昨晚は無事でしたなあ』と、なっているほどだ。

(今夜も、何事もなきやいいんだが)

源七たち岡っ引きは、蟻螂の居造を追いつつ、お芳殺しの下手人も探さねばならないのだ。

そう考えると、源七は、どっと疲れが肩にのし掛かるのを感じ始めた。

「いるかえ」

夜半やはんになって長屋に戻った源七が、床の隠し扉から寝酒用の酒を取り出した時、戸口で聞いた声がした。

「ああ、入んな」

返事の代わりに、がらりと戸が開いて、おろく婆さんが入ってきた。

「で、どうだった？ほとけ長屋」

「あんた、年のわりに目が硬えなあ」

「何言ってるんだい。あたしやまだ若いよ」

そう言って、おろくは部屋を見回した。

「しかし、この部屋は、いつ見てもすごいね」

婆さんがそういうのも無理はない。

狭い部屋のほとんど全てを占める、檯板かしいたを用いた台の上には奇妙な形のし

かけが取り付けられ、おろくには、何に使うのか皆目分からない小道具が、放り出されたままの向きで数多く置かれているのだ。

のみならず、台の横、肩身を狭めるように敷かれた万年床の周りには、木箱や円盤型に切り抜いた木片などが乱雑に転がっていた。

岡っ引き源七の本業は、からくり職人なのだ。

源七のつくるからくりは、そのどれもが思いもかけない動きをするものだったが、中でも、とりわけおろくを驚かしたのは、部屋の奥、羅紗布らしゃふの上に大事に飾られている木の箱だった。

それは、源七が、昔、世話になった人の形見分けとして貰ったものだという雷を作り出すからくりだった。

「えれきてる」というらしい、その箱から伸びた金物の髭を触ろうとして、痛みを伴う痺れが走ったのを、おろくは一生忘れないだろう。

しかし、奇怪な道具に熱中するこの変わり者の岡っ引きを、おろくは気に入っていた。

馴れぬ江戸言葉をつとめて使おうとする心がけも好ましい。

源七は、もと大和国郡山藩の勘定方だった星露誠之進せいじうの一子として生を受けた。

名を星露源七朗という。

母きぬえは、元来、蒲柳ほりゅうの質しつであったためか源七朗を産むとすぐに死んだ。

その後、誠之進は、後添えももらわず一人で源七朗を育てたが、明和六年に勘定奉行失脚のあおりをうけて浪々の身になった。

数年間、諸国を流浪した後、江戸に住みついた親子は、一人の奇人と知り合った。

本草学者にして戯作者げさく、名は国倫、字は子彝、号を鳩溪と称する一代の傑物。

平賀源内である。

やがて、町人として市井しせいに生きる決意を固めた源七朗は、名を源七と変え、源内について、からくり職人の修行を始めた。

源内の肝いりで、数年間長崎に遊学し、江戸に戻って職人としての目鼻がついたころ、同じ長屋のみよと知り合い祝言しゅげんをあげた。

今も源七は思う。あの頃は全てのしかけがうまく動いていた。

歯車が狂いだしたのは、四年前だった。

平賀源内が、突如刃傷沙汰に及んで獄死したのだ。

時を同じくして、父誠之進も病に倒れた。

師匠と親を亡くした悲しみを分かち、和らげてくれたみよは、二年前にあっけなく殺された。

そして、今、源七は、からくり職人として生計を立てつつ、岡っ引きをして、日々を過ごしている。

人の一生とは、まこと数奇なものだ。

源七が「からくり源七」と二つ名で呼ばれるのは、からくりを扱う職人がかつて多く住んでいたために、からくり長屋と称される裏長屋に住んでいるからだ。

もつとも、飢饉続きのご時世で、世はからくりどころではなく、長屋に住む職人も一人減り二人減り、今では、とうとう源七だけになってしまった。

「おろくさん。あんたに頼みがある」

源七が真顔で切り出した。

頼み事がある時は、おろくの下にさんがつく。

「京津屋総五郎について知っていることを教えてくれねえか」

「ああ、いいよ」

おろくはそう言うと、蓋が取れて得体の知れない撥条仕掛けばねじかが覗のぞいている

桐の箱を、指先で押しつけながら上がりがま櫃に腰をおろした。

「いや、あたしもあまり詳しくは知っちゃいないんだけどね」

「知っていることだけでいい。総五郎が行方をくらすます五年より前つていうと、俺は修行の真つ最中で、世間のことなんざ、まるで知っちゃいなかったんだ」

「ああ、そうかい。そうだね。わかったよ。まず……総五郎つて人は、あまりいい男じゃなかったね」

「いい男じゃない？つてえと悪人かい」

「いや、歌舞伎役者みたいじゃないつてことさ」

「なるほど」

色男ではないということらしい。

「火除ひよけ菩薩で有名だった頃、どんな男なんだろうつて、一度見に行つたことがあるんだよ。その時、なんで、年中部屋の中で仏像を彫っているくせに、あんなに色が黒いんだろうつて思ったのを覚えているよ。おまけに、目つきが鋭くてね。顔は一面あばただらけで唇が分厚いし……」

源七は思わず吹き出した。おろくにかかれば希代の仏師も形無かたなしだ。

「だから、京津屋のおかみも、初めのうち一緒になるのをは嫌がつたんだつていうのがもつぱらの噂だった。それに……実はもう一つ噂があつてね。そのころ、おかみには二世にせいを誓つた相手がいたつて話なのさ。なんでも、腕のいい職人だったそうだけど。まあ、縁談は父親の光彩が受けてしまったから、嫌も何もなかったらしいけどね」

「すると、二人は、惚れあつた仲ではなかつたんだな」

「少なくとも、おすみさんの方はね」

おろくは小さく嘆息して、

「あの時は色んな噂が飛んだからね。総五郎さん寄りの人の意見では、おすみさんが他に男を作つて、それが総五郎さんに知れてああいう事になつた、

とか言ってたし……もちろん、根も葉もない噂だと思っけどね」

「商売はうまくいったのかい」

「そのようだね。あそこは番頭がよくできてるから」

「今言った、おすみの『他の男』ってやつだが、誰か名前が挙がっていたかい？」

「いや、名前は聞かなかったね」

「今、おすみには誰か男はいるのかい」

「表だっては誰もいないはずだがね」

「そうかい——言造ってのは？」

「ああ、あの子は先代雨右衛門さんが、草津から預かった小作人の子供なんだよ」

「ああ、そういうえば、京津屋は草津の出だったな」

「小さい頃からずうたい図体ばかり大きくて気が弱い上に、生まれてまな間無しにかか罹った熱病で話ができなくなってるね。田舎じゃ随分いじめられたって話だよ。

だから江戸に呼んでくれた雨右衛門さんの事を神様みたいに思ってた、亡くなった時には、何日もお墓の前で寝てたっていうんだから、まったく、今の若い丁稚連中に聞かせてやりたいくらい立派な忠義の子だよ」

どこから仕入れるのか、こういう話に関する限り、おろくの耳は閻魔大王から授かったのではないかと思うほどの地獄耳だ。

「総五郎との仲は」

「それがねえ、あの子は総五郎のことは何とも思っていないみたいだね。やっぱり、雨右衛門さんが倒れた時でさえ、昼も夜も一番倉に籠もって仏像ばかり彫って面倒を看なかったのを恨んでいるのかね。どっちかって言うくと、雨右衛門さんのために薬を探して江戸中をかけずり回って、親身になって世話をしたご内儀、おすみさんのことを主人だと思ってるって話だよ」

源七は、おすみに付き添う大男の姿を思い出して頷いた。

「今、わかるのは、それぐらいかねえ」

すまなそうに言うおろくに源七は笑顔を見せた。

「それだけ教えてもらえたら御の字だ。ありがとうよ、おろく」

次の日、源七は、神田にたむろする小僧どもに銭を与えて、昨夜仕入れた知識の裏をとるように申しつけ、京津屋に足を運んだ。

おろくの話で、いくつか気になることがあったからだ。

番頭に命じて一番藏を開けさせる。

軋みながら戸が開くと、中から冷たい空気が流れ出し、知らず源七は身震いをした。

「きれいにしてあるな」

「はあ、お嬢さんが、しょっちゅうこの藏に出入りしておられましたので」

「お芳が……中は昔のままか？」

「はい、旦那様が使われていたままにしてあります」

藏の中は思ったより広がった。

床の真ん中に丸い跡がついている。ここに焼かれた仏像が置かれていたのだろう。

番頭に尋ねると、果たしてそうだった。

そして、その周りを、ぐるりと取り囲むように蝋燭立てが立てられている。

贅沢なものだ。庶民には蝋燭など高値すぎて手が届かないというのに。

「なるほど、こうして、藏の中を昼間のように明るくして、昼夜問わずに、仏像を彫り続けていたわけだ」

源七自身、夜にからくりの修理をする時は、煤が多く生臭い魚油を用いたとうしみを使うので、蝋燭を多用するこの作業場にうらやましさを感じた。

「ん？」

源七は、部屋の隅に置かれた道具に手を伸ばした。

「珍しいものがあるじゃねえか」

それは強盗提灯がんとどうだった。

銅で釣鐘形つりがねがたの外枠を作り、中の蠟燭立てが自由に回転するようになって提灯で、先方だけ照らし、自分の方へは光がささないようになっていて、それだけでなく、この強盗提灯は蓋ができるようになっていて、蓋を閉めると、光を外に漏らさないよう工夫がされていた。

源七の悪い癖で、こういうものを見ると、からくり師としての好奇心を抑えられなくなる。

「面白いな……」

しばらく提灯をひねくった源七は、番頭を振り返って尋ねた。

「で、観音像はどうした」

「かなり酷く焼けた上、水浸しになっていましたので、近くの寺で供養をして、燃やしていただきました」

「彫り直したりはしなかったんだな」

と、これは職人としての源七の言葉だ。

「実は、私どもも、そうすれば良いと思っただけです。お顔がきれいなまま残っておりますので。ですが、お背中が炭のようになっておりましたので、諦めたのでございます」

「仏像の前はあまり焼けていなかったのか？」

「はい。そうでございます」

「そうか」

しばらく藏の中を眺めてから源七は尋ねた。

「お芳が、よくこの藏に来ていたと言ったが……」

「はい。さようでございます。お嬢様は、頻繁にこの藏にお出でになりました。とくに大切なものが保管してあるわけでもございませんから、おかみさんも、藏の鍵をお渡しになっていたと思います」

「わかった。手間をとらせたな」

そう言って藏を出た源七は、なにか気持ちにひっかかるものを感じて振り返る。

明るい庭から暗い藏の中を覗き込んでも、はじめは何が引つかかるのかわからなかった。

が、やがて気づいた。

燭台に立てられた蠟燭が、端からだんだんと短くなっているのが妙に気になったのだ。

だが、それにどんな意味があるというのだろう。

源七は、頭を振りながら踵かかとを返し、藏を後にした。

京津屋を出た源七は、いったん長屋に戻り小僧たちの帰りを待った。

夕刻、小僧どもから話を聞いたが、全てがおろく婆さんの言葉を裏打ちするだけで何ら新しい話はなかった。

次の日の夜、源七は鉄藏と、再び伊那六の切り株に腰を下ろしていた。

宵よいに立ち寄った番屋で鉄藏と会い、そのまま連れだって、ここにやって来たのだ。

「旦那、あつしはね。二年前に女房を守れなかった。だからこそ、もっと強い誰でも使える護身道具が江戸の町には必要だと思っんですよ」

相変わらず、甘酒をすすりながらの話だ。

「だから、その考えは両刃もっほの刃じゃと申しておるのだ」

鉄藏の方はとうに出来上がっている。

「どうしてます」

「例え身を守る手だてとはいえ、簡単に人を傷つける道具を市中に広めてはいかん。悪用する者が必ず出てくる」

「……」

「なぜ、二年前に、わしがお前を岡っ引きにしたと思う？」

源七には答えられなかった。

確かに、そのことは、源七にとって大きな謎だった。

鉄蔵が、生きた死人のように毎日を過ごす自分を気に掛けてくれ、生き甲斐を与えようとしてくれたのは分かる。

だが、それだけでは当時の鉄蔵の熱心さの説明がつかない。

源七がそう言うと、鉄蔵は、その通りだ、と頷き、続けた。

「わしがお前を岡っ引きになるようにくどき、試しにお前が関わった最初の殺しを覚えているか」

「しだれ柳の三吉殺し、でしたか」

「その通りじゃ。花火職人の三吉は、内側から、かすがいで窓や戸を打ち付けた部屋で殺されておった。あの時、お前は自分がなんと言ったか覚えておるか」

「さあ、なんと言いましたか」

「『こんなややこしい事をして何になる。自分なら、からくりを使って確実に人を殺して完全に証拠を消す事が出来る』そう言ったのだぞ」

源七は苦笑した。そう言えばそんなことを言ったかもしれない。

「覚えておるようだな。そして、おそらく、お前は、まだそう思っているはずじゃ。それは良い。殺してやると口で言うものは多いが、本当に殺せる者は少ないからの。が、問題なのは、思うだけでなく、お前が、もし本気なら、実際にそれができるということだ。源内亡き後、お前のからくりの腕前を本当に知っているのはわしだけじゃからの」

「旦那の買いかぶりですよ」

「いや、いくら腕の立つ剣術遣いでも百人は一度に斬れまい。だが、源七。

お前は、その気になれば、一度に何百人も殺すことができるからくりを仕掛

けることができる」

「そうかも知れない……。源七は、心のうちでつぶやいた。事実、みよが殺された時、源七は賊を皆殺しにするからくりを、江戸市中に仕掛けるところだったのだ。」

「わしは、それが恐ろしい。あの時、わしは思ったのだ。わしの目の黒いうちは、決してお前の気持ちを暗闇に向けさせてはいけない、と。お前のような者は、常に強い力に引き裂かれ、泣かされる側から世の中を見るべきだ。お芳やおすみのような弱い者の側からな。そして、お前の捕り方としての力を、その者たちの為に使ってほしいのだ。悪い者共に悪用されかねぬ道具づくりなどに使わずにな」。

源七は、黙って頭を下げた。

それから数日を経ても、お芳殺しの下手人は杳ようとして知れなかった。

その間、源七は、連日、目の回るような忙しさに負われていた。

もつとも、忙しいのは岡っ引きの仕事のためだけでは無い。

もうずっと先に、「さる大名家の要職にある御仁ごじん」から、からくりの複製を頼まれたことがあったのだが、それが今頃ただ崇たつてきたのだ。

三日前に、その「御仁」の使いから、もう出来ておるであろうと催促があった。

さすがに、四月よつき以上まえに頼まれた仕事にまだ取りかかっていないとはいえず、今しばらく、と引き取ってもらったのだが、源七は、それからは、ずっとその仕事にかかりつきりになってしまったのだ。

その間、お芳殺しの探索は小僧どもに任せてある。新しい材料が入らないかぎり、下手人もわからないと割り切っているのだ。

夕刻、小僧共はぞろぞろと連れだって、からくり長屋に一日の成果を伝える。そこで話を聞き、次の日やるべき事を伝え、駄賃を渡して帰すのだ。

さすがの小僧どもも、今度ばかりは、以前のころしの時のように、役に立つ情報をすぐに掴んでくることはできないようだった。

夜になって近くの屋台にうどんを食べに行った帰り、思いついて、おろくの部屋を訪ねてみた。

最近、顔を見かけなかったので、どうしたことかと気に掛かっていたのだ。勝手知ったるおろくの家の、戸を開けようと手を掛けた時、中から戸が引き開けられ、若い娘が顔を出した。

丸顔の、ぽちゃぽちゃとした愛らしい顔立ちの娘だ。

「あら、まあ」

娘は驚きもせず、大きな目で源七を見つめてから、にっこりと微笑んだ。

「源七親分さんですね」

そうだと答えると、娘は胸を張り、私はりんと申します、と答えた。

おろくと血縁であることは、ちよつとした仕草と鼻の形で知れたが、源七は、あえて尋ねてみる。

「いえ、あたしたちは血はつながってないんです。まあ娘みたいなもんですけど」

源七が面妖みょうな顔つきをしているの見て、言葉が足りなかったと思ったのか、娘はこう続けた。

「あたしのおとつあんと、おろくのおっかさんは、長いこと一緒に暮らしてたんです」

そういつて、りんは、源七の知らないおろくについて話し始めた。

りんの本当の母親は、りんが生まれるとすぐに死んだ。

父親は、しばらく独りでくらしていたが、りんが五歳の時、おろくと暮らしはじめた。もう何年も前に二人は別れたのだが、りんは、おろくだけが本当の母親のように思えて、今も行き来をしている。

「別れる時は大変だったんですよ。殺すの死ぬのつてね。その騒ぎは今でも近所でからかわれるほど……」

りんは今年十七になるそうだから、おろくが、その男と暮らしていたのは、四十をかなり過ぎてからの事だろう。

そう考えて、源七は微妙な違和感を覚えた。

まったく迂闊なことに、源七は、おろくにそのような、生臭いといってよい若い頃があったということをつっかり失念していたのだ。

誰にでも若い時はある。考えてみればあたりまえのことなのだが。

「で、おろくは？」

「おっかさんは今寝込んでるんです」

「何処が悪いんだ。ひどいのかい」

「風邪をひいちゃったみたいで。さっきまで起きていたんですが、今しがた寝たんですよ。いえ、心配することは無いと思いますよ。本人は、夏の疲れが今頃出てきたんだ、なんて言ってます」

そういえば、最後にあつた夜、おろくの顔色はあまりよく無かった。

おりんの肩越しに、部屋の奥に見える、静かに目を閉じて横になるおろくの姿は、いつもよりずっと小さく見えて源七を少なからず動揺させた。

何かできることがあれば言ってくれ、と言い残し、源七はりんを背を向ける。

その時、源七は、りんが大きい眸をくりくりさせながら、何か言いたそうにしているのに気づいた。

「なんだ？」

振り返った源七はりんに向かっていった。

「いえ、源七親分って、本当に、おっかさんの言うとおりの人なんだなあつて」

「何だい。どうせ、ろくな事あ言っつてねえだろう」

「あら、そんなことはないわ。岡っ引きなんてろくな奴はいないけど、源七親分は違うって。さすがに鴨居の旦那が見込んだ男のことはある。勘は鋭いし、頭は切れるし。何よりね、目の高さが、あたしたちと同じ高さにあるのが良いって」

「目の高さねえ」

源七は、自分のあごのあたりで揺れるりんの質素なかんざしを見ながら首を傾げた。

「もう、親分ったら。背の高さのことじゃりませんよ。おっかさんが、親分は背の高い人だけど、気持ちの上で決してあたしたちのことを見下してはいない人だって」

「嘘だな。おろくがそんなに良いことをいうとは思えねえ」

「本当よ。あたし、会ってみて分かった。おっかさんの言葉が本当だって。それにね……」

「なんだ」

「言葉が、ちよつとなまってるっていうのも本当だったもの」

源七は、黙って戸を閉めた。

まったく、子供の相手なぞしてられねえよ。

そう思いながらも、久しく感じなかった何か暖かいものが胸に残るのを源七は感じていた。

京津屋の内儀おすみは、夫、総五郎が行方知れずになってから、店から一丁ほど離れた別宅に住んでいる。

お芳殺しがあつてから五日後、源七はおすみを訪ねた。

先日は、鉄蔵が別宅を調べたために、源七が実際に足を運ぶのは、これが初めてのことだった。

門番に名を言うと、しばらくして玄関に案内された。

別宅とはいえ、門をくぐれば、向こうには広い庭が広がり、大きな池には優美に鯉が泳いでる。

ふと庭の端を見ると、庭の一角で男が鍬くわをふるうのが見えた。言造だ。

「あれは？」

案内の男に尋ねると、

「言造が薬草をつくっているのをごいいます。もとは、このお屋敷は、大旦那さまのお住まいでしたから。大旦那さまのお体のために植えた薬草が今も数多く残っております」

そう男は答えた。

「よくいらしてくださいました」

玄関に、おすみが迎えにきた。

勤めて元気そうに振る舞っているが、目の下にできた隈が心労を物語っている。

「下手人についてなにか？」

「いや、ちょっと近くに来たものでな」

挨拶を交わしながら、家の造りなどに目を配る。

「俺たちも、今、必死に調べてるんだが、なかなか手がかりがない。ご内儀は大丈夫か」

「もう随分落ち着きました。でも、本当に悔しうございいます。素直で聞き分けの良い子でしたのに……」

「だが、気の細い所もあつたって話だ」

源七が、おすみの顔を見ながらそう言うと、案の定、おすみの顔色は目に見えて変わる。源七はさあらぬ体で言葉を継いだ。

「総五郎の事だが」

「なんでもございましょう」

「お芳を殺ったのは、総五郎じゃねえかという噂があるのは知っているな」
「そのことでございますか。あの人は、お芳を、それはもう猫可愛がりに可愛がっておりますから、お芳を手にかけるなどということは絶対にございません」

「そうかい。でも、あなたは危ないかもしれねえな」

「そんなに私のことを思っていたら、嬉しいのでございますがねえ」

「とうとうと」

「恥を申さねばなりません、あの頃、うちの人は、店の者が自分の思うように働かない事に腹を立て、仏像造りに一心に打ち込んでおりました。あんまり私たちを放ったらかしにして、一番倉で鑿ばかり振るうあの人に腹が立つて、あの日、わたしは、仏像を押し倒してしまったのでございます」

「罰あたりなこったな」

「本当にそうでございますね。けれども、亭主の心を掴んで離さない仏像なんか、いっそ無い方が……と、あの時は、そう思ったのでございます」

「それが、諍いひかいの始まりかい」

「そうです。あとは親分さんもご存じのような事で……」

「あんたを槌で殴った後、大変な事をしたと思った総五郎は、諍いの元となった仏像に火を掛けて逃げ出した。だから、総五郎は、後悔こそすれあんたに恨みを持っていないということか」

「けんかもありますが、そこは夫婦の内のこと。大した傷でもなかったことですし、あの人が逃げる事もなかったのでございます。大方は、世間の口にするのを恐れて京へでも行ったのでございましょう。恥をひどく嫌う人でしたから」

「かも知れねえな」

長居をしちまった、と腰をあげかけた源七は、つと振り向いて、こう言った。

「ああ、そうだ。来たついでに聞くんだが、お芳は、昔、ほとけ長屋に総五郎が住んでいたことを知っていたのかい」

「さて、わたしどもは、そんな話をした覚えはございませんが、店の誰かが申したかも知れません」

「なるほどな」

別宅を出た源七は長屋に戻ることにした。

長屋に帰ったついでに、おろくの様子をみることにする。

りに会ってから、おろくとは顔を会わせていなかったのだ。

「これは親分。この間は、とんだところをお見せしちまって……」

源七の顔を見るなり、おろくが、すまなそうに言った。

「すっかりよくなったみてえだな」

戸をくぐりながら源七は言い、

「やっぱりおろくさんは元気でねえとな」

上がり框に座り込んだ源七に、おろくは茶をすすめた。

「それはそうと、おりんが何か余計なことを言わなかったかい」

「いや、そんなことはねえよ」

「親が甘やかすもんだから行儀作法がなくなってなくてね」

「良い娘じゃねえか」

「本当にそう思うかね」

「思うとも」

頷く源七に、おろくは真顔になって、

「だったらね親分。おりんを貰もらっておくれでないかい」

源七は、あやうく茶を吹き出しそうになった。

「貰うって、猫の子じゃねえぞ」

「あたしが言うのもなんだけど、良い娘なんだよ」

「冗談もたいがいにな」

「本気なんだよ」

「もういいから。その話は無しだ。いいな」

「……」

「おろく！」

「わかったよ、親分」

しばらくの間、気まずく黙り込んだ二人だったが、やがて、おろくが先に口を開いた。

「ところで親分。あたしは、この何日か寝ながら考えてみたんだよ」

「何だ。何か思いついたのか」

「あたしたちは、お芳殺しを、総五郎さんに結びつけて考えすぎてたんじやないかね」

「どういうことだ」

「ねえ、源七親分。蠅螂かまきりの居造いぞうは、江戸の何処どこに住んでいたんだろうね」

「ふむ」

「親分は、居造が成駒屋に引き取られてからの事は知ってるね」

源七はうなずいた。

江戸にやって来た居造は、成駒屋で働きでしたが、他の使用人との折り合いが悪かったため、大番頭の計らいで葉売りとして近在を回ったのも束の間、すぐに行方をくらましてしまったのだった。

原因は、言葉なまりをからかわれたことにあるらしい。

それは源七にもよく分かった。

江戸に出てきてしばらくは、自分のなまりが気になって、人の言うのを聞いたり、黙り込んだり、いろいろやるものなのだ。

なまりは国の手形、とはいっても、江戸にあつては、江戸言葉こそが正しい言葉であり、それ以外のなまりを話す者は、あくまで他国者として扱われる。

なまりを抜こうといろいろやった挙げ句、源七は、いかげんうんざりして、江戸言葉を意識せずに話すようになった。

すると、今まで、話すたびに言葉尻を捉えていた江戸っ子も、普通に話を聞いてくれるようになったのだった。

源七は、こちらが意識するから、かえって余計に妙な話し方になってしまい、それを皆が聞き咎めていたことを知った。

もつとも、源七が今でも江戸言葉をうまく話せないのは、先だって、おりに指摘された通りなのだが。

「姿をくramました居造は江戸の町に紛れてしまったけど、顔の傷以外に、一っだけ居造について知られていることがあるね、親分」

「なんだ？」

「手につけた職だよ」

「なるほど表具か」

源七は膝を打った。

山で、ずっと木々を相手に生活していたお陰で、小刀こがたな、鋸のこぎりの類たぐいの扱いに巧みだった居造は、成駒屋を出たあと、生活のために表具師の修行をしたことが知られている。

「ほとけ長屋には仏師以外に表具師も何人か住んでいたんだろ」

源七は大きくうなずいた。

「居造が、表具という表向きの仕事で身を隠すために、ほとけ長屋はおあつらえ向きというわけだ。おそらく、手下の誰かを身代わりに住まわせて、表具の仕事を手伝っていた……」

「そうさ」

「そう考えれば、ほとけ長屋は、子供がうろつく場所としては、ひどく危ない場所になる」

「子供ってのは、小さいからどこにでも入り込みまうもんなんだよ」

「父親が住んでいた場所ときいて、ほとけ長屋をうろついていたお芳は、偶然、居造たちの、火付けか押し込みの相談を聞きちまった。居造一味には、猪の佐吉という大男がいる……」

源七は、お芳の首の傷を思い出していた。

「あいつなら——あの殺し方ができる」

「平仄はあうだろ」

源七は、おろくの難しい物言いに苦っぽく笑って、

「つまり、居造一味を捕まえば、お芳殺しの下手人もあがるかも知れねえってわけだ。よし、一応はその線もあたってみよう。だが、その為には、奴らが、いつ、どこへ押し込みに入るかが分からないとな」

「それなんだけどね、親分。あたしや、どこへ押し込みに入るかは分からないけど、どこに火をつけるかなら分かんと思うんだよ」

「なんだって」

源七は身を乗り出した。

「よく考えりや簡単なことなんだよ、親分。小火じゃなくて、大火事になった火元の場所を順に言っておくんないな」

「馬喰町齋木屋、諏訪町白船屋、駒形町真菰屋、材木町吉乃屋……」

「そこに何か繋がりはないかい」

「今までも考えたさ。だが、いくら考えても分からねえ」

「分かるはずだよ」

「何だってんだ」

「京津屋総五郎の仏像」

あ、と源七は叫んだ。

「そうか総五郎が世に出るきっかけになった火除菩薩の置かれているところだな」

「そうさ。なぜかは分からないけど、菩薩のある場所が、お城から離れるよ

うに順を追って火がつけられてるんだよ」

「その順でいくと、次の火付けは……」

「材木町の黒田屋」

「その通りだ、ありがとうよ」

源七は礼を言ってお立ち上がり、自分の住処すまかに戻った。

神棚かみだなの前に設えた棚しつらから、櫛けやきで出来た十手を取り上げ、すでに差ししている十手に交差するように腰に差すと独り言をいう。

「蟻螂の居造。奴も年貢の納めどきだぜ」

月の無い夜だった。

その闇の中、材木町の東のどんつき、用水桶の後ろに蹲うすくまる源七の姿があった。

「ちくしょう、冷えやがるな」

そう呟いた源七は、小ぶりの瓢箪ひょうたんを懐から取り出すと栓を抜き、中の酒をぐいと一飲みした。

あれ以来三日、子の刻ねこくから寅とらの刻こくまで、毎夜、ここに陣取って黒田屋を見張っているのだ。

黒田屋は、今は馬喰町に店を移して材木町の店は空き家同然になっているが、火除観音は店に祀まつられたままだった。

刻限はそろそろ寅の刻になる。

と、闇の中から溶け出るように、黒い影が突然現れ、黒田屋に吸い込まれるように消えていった。

源七は、音を立てずに立ち上がるとその後を追った。

影はするすると広い庭を横切ると屋敷に取り付き、そのまま木戸を外して部屋の中に入って行く。

中から、火打ち石を打つ音が聞こえ出した。

(空き家だからって、派手なことをしやがる)

源七が、庭の飛び石伝いに建物に近づくと、ぱっと明るい光が走り、木戸の外れた隙間から赤い切り火の揺らめきが漏れだした。

源七は部屋に上がり込んだ。

男がひとり、床にうずくま蹲っている。

「待ちな」

源七の声に振り向いた男は、黒ずくめに黒い覆面をしていた。

畳に置いた燭台で、蝋燭の炎が揺らめいている。

「蠅螂の居造一味だな」

男はゆっくりと立ち上がると覆面をはずした。

顔が半分に分かれて見えるほどの傷跡が現れる。

驚いたことに、火付け役を担になっていたのは頭領の蠅螂の居造だった。

「お前は誰だ？」

限七は、それに答えず、腰に差した木製の十手を抜き出して、ゆっくりと構えた。

その距離およそ六尺。十手と鎌では、まだまだ遠い間合いだ。

「俺の名は、神田からくり長屋の源七。からくり源七と呼ぶ者もいる」

「ああ、お前が源七か。聞いているぜ」

居造は薄く笑った。

「おめえは、どうしてこんなことになっちゃったんだ。成駒屋を出たあと、表具師になって、それで良かったんじゃないかねえのか」

「……傷だよ」

「傷？」

「この顔の傷だ。なまじ腕に自信があったばかりに、酔って、侍相手に喧嘩を売って、挙げ句の果てがこの様よ。表具の腕で生きていこうとした矢先

のことだった。この傷じゃあ、とてもまともな仕事なんか来やしねえ。惚れた女にや逃げられるしな」

「女ってのは、おすみのことか？」

それに答えずに、にやりと笑うと、居造はゆつくりと懐から異形の鎌を取り出した。

刃に巻いたさらしを、するすると剥ぎ取る。

それを宙に放ち、奇妙な手つきで鎌を構えると、居造の全身から源七が感じたこともない殺気があふれ出した。

「あんたもからくり職人だったんだろう」

「そうだ」

「どうして岡っ引きなんかになった」

「家族を……」

言いながら源七は一步前に出た。居造が一步退く。

「殺されたのさ」

「子供か？」

源七は首を振った。

「親か？」

再び首を振る。

居造はそれ以上尋ねず、

「なるほど、それは辛かろう」

ぼつんと言う。その声は、ぞつとするほど冷たかった。

「だが、心配するな。今からあんたも同じ所に送ってやるよ」

「うまくいくかな」

「あんた、おれの事を？」

「知っているさ。鎌を使った奇妙の剣を使うとか」

「その俺に、からくり職人あがりのお前が、かなう訳はない」

「それでもな、やらねえと……」

源七が言い終わらぬうちに、居造の手許から蒼い光が走った。

到底避けられぬ速さであったが、源七は体重を後ろ足に掛けていたおかげで、かろうじて光を十手で弾くことができた。

間に立ち並ぶ柱のお陰もあった。

距離およそ五尺半。鎌にしては恐ろしく間合いが長い。

その刹那、源七は理解した。

蒼い光が弧を描いて戻るのを見たからだ。

居造は、おそらく鎌に黒紐などを結びつけ、投げとばしているに違いない。

間合いの伸張にのみ紐を使い、話に聞く穴戸梅軒の鎖鎌のように鎖で刃を受け止めることはしないから、見えにくい細い紐を使える。

そのために、今まで人目につかず、多くの腕効きが破れたのだ。

「お前のその十手……」

鎌を弾いた拍子に十手の櫛が削れ、中から何かが覗いていた。

「ああ、これかい」

源七は、ゆっくりと回しながら、十手の鞘をはらった。

そのあとには、鈍色に光る針のような刀身が姿をあらわす。

「こいつあ、お上からいただいている十手じゃねえ。お前さんみたいな手練れを相手にする時のために俺が作った特別の十手なのさ」

「おもしろい」

言うが早いか、再び光が走った。

今度も、なんとかかわすことができた。

源七のかわりに後ろにあった衝立が、七三に別れて飛び散る。身を起こしながら、源七は少し居造に近づいた。

居造の失策は、屋内での戦いを余儀なくされたことだった。

広い場所なら、自在に鎌を飛ばして、たちまち源七の首を切り裂いたことだろう。だが、柱の多い部屋の中では、なかなかそういうわけにはいかない。

四度目の斬撃が来たとき、二人の間合いは五尺になった。

源七は、鎌を交わしざま、十手を真つ直ぐに居造の利き腕に向け、握りに埋め込んだ釦を押した。

音もたてず刃先が居造に向けて走った。

運命の非情が、居造を襲ったのはその時だった。

源七の手の不審な動きに、とっさに居造は体を返そうとした。一流の遣い手として当然のことだ。

その瞬間、先ほど跳ね飛ばした衝立の破片に足を取られた。

体が前方に泳ぐ。

放たれた刃は、まっすぐに居造の喉元に吸い込まれた。

駆け寄った源七は、居造の首の後ろに突き出た切っ先を見て刃を抜くのを諦めた。

抜けば大量の出血で、直ちに居造は命を失うだろう。

「い、こいつは……」

ごぼりと血の泡を吹きながら居造が言った。

「俺が作ったからくりだよ。飛十手という」

「……」

「あんたのような腕利きは、相手の手や肘、足さばきに応じて、自然に体が動くようにできている。もし俺が同じ速さで小柄を投げたら、たちまち払い落とされていただろう。だが、なんの前触れもなく、飛ぶとは思わぬ刃が飛んでくると、まず避けられない」

より正確に言うと、絶対に避けられない距離まで近づいて撃つ事が必要なのだ。源七の飛十手の速さなら、五尺がその距離だった。

「俺を密告したのは……あいつか」

「……」

源七の沈黙をどう取ったのか、居造の口の端が引きつるようにつり上がった。

「どうした」

「いや、蠮螋かまきりって二つ名が気に入らず、自分じゃ流れ鎌の居造と名乗っていたが、やっぱり俺は蠮螋なんだなあってな……考えてみりゃあ、男はみんな蠮螋みたいなもんだ」

そこまで言って、居造は再びごぼつと啖血かっけつした。

「お前は殺したくなかった」

源七の言葉に、出血のために蒼白になりつつ居造は言った。

「いい……さ。気に……するな。いずれ……こうなる……」

その言葉を最後に、上総かずさの獵師の子として生まれ、後に蠮螋の居造として波乱の人生を歩んだ男の命の火は静かに消えていった。

源七は、畳に流れる血と、手にした飛十手を交互に見た。

「いずれ――」

源七は居造の骸むくろに呟いた。

俺は、飛十手を使わずに、ただの十手で手練てだれの賊と渡り合うようになるだろう……そして殺られるに違いない。

鉄蔵の言うように、からくりは人殺しのために使うものではないからだ。

道具に頼るものは、やがては道具に裏切られる。

源内先生は、あれほど西洋のからくり精通しながら、決して人殺しの道具は作らなかった。

俺は、からくり職人としては、すでに外道に落ちているのかも知れないと、源七は長い溜息をついた。

「やっぱりね」

明け方近く、まだ暗い中をからくり長屋に帰ってきた源七を、すでに起きていたおろくが捕まえて戸口に引つ張り込んだ。

ひと通り、話を聞きいてそうつぶやく。

「お芳ちゃんは、行方知れずの父親が、いつか帰ってくると思って、ほとけ長屋に日参するうちに、長屋に潜んでいた居造の顔を見ちまったんだね。あれほど目立つ傷のある顔だ、どんな子供でも一度見たら忘れない。だから殺されたんだね」

押し込み一味は、なかなか鳴らない半鐘はんしやうを待つうちに、痺れを切らして海鮮問屋、相模屋に押し込みをかけ、あらかじめ市中に撒かれてあった捕り方に取り囲まれ御用になった。

火事を利用した騒ぎに紛れなかったために、あっさりと捕まってしまったのだ。

その中には副頭領の猪の佐吉もいた。

この男が名前を変え、ほとけ長屋で表具師として暮らしていたことも露見した。

今はまだ、お芳殺しを認めていないが、お上のきつい詮議にきつと口を割るだろうと思われている。

「可愛そうに、父親の面影を追ったばかりにねえ」

おろくの言葉にうなずき、いれてくれた茶を飲みながらも、源七の顔色はすぐれなかった。

どこかがおかしかった。何かが釈然としない。だが、それが何か分からない。

そんな源七の気持ちをやよみに、おろくはしゃべり続けている。

「でも、これで明日、おりんに言ってやれるよ。近頃の蠅螂せうろうってのは、雌に食べられんじゃなくて、からくりにやつつけられるんだよって」

茶を飲もうとした源七の手が止まった。

突然、頭に言葉が溢れ出した。

俺はやっぱり蠟螂なのさ……雌に食べられる……。

強盗提灯……

不規則に滅った蠟燭……。

ほとけ長屋に通い詰めるお芳……。

頭の中で音を立てて何かが弾けた。

「おろく！」

突然大声を上げた源七を、驚いたように見つめる婆さんに源七は言った。

「俺は、とんでもない勘違いをしちまつたぜ」

驚くおろくを後目に、源七は家を飛び出した。

早朝の京津屋の別宅は、明かりが消えてひっそりとしていた。

ずいと門を押し開けてくぐった源七は、小走りに玄関に近づく、引き戸を十手で叩いて声をかけた。

「こんな時分にすまねえ。源七だ。戸を開けてもらえねえか」

しばらく待ったが返事が無い。

もう少し強く戸を叩いてみる。

しかし、中で人の動く気配もない。

源七の腹の底で、不安が鎌首をもたげた。

我慢しきれずに、源七は力任せに戸を開け放った。

しんぱり棒はかかっておらず、勢い余って戸は外れ飛んだ。

家の中に飛び込む。

「おすみ！」

叫びながら草履のまま部屋に上がりこんだ。

この屋敷は、単純な造りのわりに部屋数が多い。

いくつものふすまを引き開けながら源七は奥へ進んでいった。

最後のふすまを開け放った途端、血の匂いが鼻をついた。

そこに、おすみはいた。

座った姿勢から、前に突っ伏した形で、身動きもせずに倒れていた。

骨が砕けているのか、首が不自然に曲がって大量の血を口から流している。

突然、危険の予感がした。首の後ろの毛が逆立つ。

源七は、理屈好きなからくり職人だが、経験からこの種の予感だけは無条件に信じるのだ。

弾けるように前方に飛んで振り向くと、言造が、火のついた蠟燭を手に立っていた。

その時、恐怖の原因が分かった。

油の匂いだ。奥の部屋から強烈な油の匂いが流れてくる。

「よせ。言造」

気づくと、大男は全身を油まみれにしていた。

「みんな分かっているんだぜ」

源七は声押し殺すように言った。

「お芳を殺したのはお前だな」

言造の表情は変わらない。

源七は言葉を継ぐ。

「蠟燭ろうそくだった」

言造の手がぴくりと動いた。

「な、そうだろう。お前は、一番倉の蠟燭の減り具合から、お芳が何日かおきに一本ずつ、長い間、蠟燭に火をつけていることに気づいた。

不審に思ったお前は後をつけ、お芳が蠟燭を強盗提灯がんどうちょうちんに入れて蓋をし、

火付けの場所まで持ち歩いて火をかけていることを知った。

お芳は、ほとけ長屋に打ち付けられた板に書かれた口上くわじょうで、火除け菩薩のある場所を知って、付け火をしてまわっていたんだな。

うまい方法だぜ。強盗提灯を使うのは。あれなら、見つからずに火を持ち歩いて、すぐに火付けに使えるからな。お前は、これ以上、お芳に火付けをさせないために——おすみを守るために、お芳を殺した。総五郎の死体を始末したのもお前だろう？」

「……」

「総五郎が行方知れずになったあの日、お前は、おすみが一番蔵から出ていくのを見た。何事か気になって、蔵に入ったおまえは、総五郎が彫りかけの仏像にしばらくつけられ、燃やされているのを見て、すぐに火を消した。その時、お芳はどこにいた？お前と一緒にいたのか。総五郎は死に、軀はお前がどこかに埋めた。おそらく自分が世話をしている薬草の下あたりだろう」

「こ、殺したのは、おかみさんじゃねえ。あの男だ。顔に傷のある。本当だ。あいつ、何度もお屋敷に忍び込んで、おかみさんと会ってた。あの時も、朝から旦那様は機嫌が悪かった。倉であの男と会って頭を殴られて……お嬢さんは、こっそり倉にやってきて、だ、旦那様が火に包まれて叫んでいるのを見て気を失ってしまった。次に目が覚めたら、すっかりその事を忘れていた……」

過度の緊張のためか、言造の言葉は落ち着いていた。

「殴ったのは居造かも知れねえ。だが、総五郎は死んじやいなかった。そのあとで菩薩にくくりつけて火をつけたのは、おすみだろう。今お前が言ったように、総五郎は生きたまま焼かれたんだ。居造は死ぬ間際に、自分が蠅螂だといった。男はみんな蠅螂だ、ともな。言蔵、知ってるか？蠅螂の雌は、雄を食つちまうんだぜ。それは、女が男を使って生き残るという意味だ。押し込みになり果てた前の男が亭主を殴ったんだ。どのみちおすみは無事には済まない。だからおすみは総五郎の息の根を止めた」

蠅燭を持って言造が近づき、源七が下がった。

「おすみは、お前がやったことを知らないから、総五郎が死なずに逃げ出し

たと考えて、番屋に駆け込んで、あの話をでっちあげた。あとで総五郎が生きて出てきた時、言い逃れができるようにな。火傷は、総五郎が仏像に火をつけた時に着物に燃え移ったとでも言うつもりだったんだろう」

「お、俺がやった。みんな。お、おかみさんは悪くねえ」

言造の顔が、揺れる蝋燭の炎の下で、泣くような笑い顔になった。

次いで、ゆっくりと蝋燭が手を離れる。

「よせっ」

ぱっと火の手が上がり、恐ろしい熱が、一度に吹き出した。

源七は、後ろを見ずに、障子を突き破って飛び出した。

が、遅かった。

袖に火がついている。

玄関だ。玄関に――

頭の中でそう反芻はんすうしながら源七は駆けた。

一番奥の部屋から飛び出したため、玄関までは、かなりの距離があつた。

徐々に着物に火が回り、自分の肉が焦げる匂いがしてきた時、玄関が見えた。

角を曲がると、池が見える。

源七は叫びながら頭から水に飛び込んだ。

群がり来る鯉を手で除けながら、水から頭を突き出した源七は大きく息を吸い込んだ。

振り返ると、折からの乾燥した空気に助けられ、屋敷は激しく炎上しはじめていた。

半鐘が鳴り始める。蟬螂の一味も、番屋で、この半鐘を聞いているはずだ。

「やつらにとっちゃ、ちょっと遅すぎる半鐘だったな」

そう呟くと、源七は水に浮かんで空を仰いだ。

東の空で雲が紫色に輝いて、夜明けを迎えようとしていた。

「俺はね、おろくさん」

すっかり陽も昇った昼近く、水浸しになり、泥のように疲れた源七が帰ってくるのを、おろくは部屋で待っていた。

衣類を換え、軽く火傷を負った右手に油を塗ってもらいながら、源七は、すべてをおろくに話すと、最後にぼつりと呟くように言った。

「今度の件は、俺の裁量さいりょうでうまく納めることができると思っただ。そのため居造は何も言わず、すべてをかぶって逝ったのだから」

「……」

「でも、結局、俺は何もすることができなかった」

「あんたららしくない弱音を吐くじゃないか」

「その通りだからさ。俺は岡っ引き失格だ」

「そいつはちがう。お芳殺しは、あたしが間違っただよ」

それには答えず源七は言った。

「俺は岡っ引きには向いてねえよ。からくり職人の方が、よっぽど俺の身の丈に合ってる」

笑おうとしたおろくであったが、源七の声に潜む重さに気づいて、真顔に戻って言った。

「そんなことはないよ。ただ、女心おんなこころつてのが分かるには、あんたはまだ若すぎるんだ」

「おんなごころ？そうかも知れねえ」

源七は、自嘲するように笑うと続ける。

「いやさ、人の心の難しさつてのを、俺はまだわかつちやいねえんだ」

畳を見ながら源七は呟く。

「からくりつてものはさ、おろくさん。理屈さえ合っていれば、こちらの思惑通りに動いてくれる。もし動かなきゃ、からくりが間違っているか、部品

を作る腕が悪いってことだ。だが、人間は……そうはいかねえ」

おろくは黙って聞いていた。

「結局、おすみは、娘を殺したのが言蔵だと知らずに逝っちまったんだな。それどころか、自分を殺したのが言蔵だと知っていたかどうかも怪しいもんだ」

「どうして言蔵は、おすみさんを殺したんだい」

「明け方の騒ぎで、奴は居造が捕まったと思ったんだろうな。居造がしゃべれば、おすみも捕まる。お縄になるよりは、いつそ自分の手で、と思ったんだろうが……」

やりきれぬ思いに、源七は呻くように続ける。

「だが、俺にはわからねえ。惚れてるんなら、どうして殺すんだ。逃がしてやりやいいじゃねえか。殺すことはねえ」

泣き出しそうな源七の顔を見て、おろくは、ふと笑った。

「惚れてるから殺すんだよ。親分。おすみさんにしても、亭主を焼いたのは嫌いだからじゃない。あたしやそう思うよ。そうでなきや、菩薩様と抱き合わせて焼き殺す、なんて真似はできっこないからね。惚れた亭主が、自分より大切なものを持っていることを知ったら、女は、一緒に焼いてしまいたくもなるもんさ」

ふと、源七は、りんの話の思い出した。

(別れる時は大変だったんですよ。殺すの死ぬのってね)

おろくは続ける。

「居造が屋敷にやって来たのは、きつかけに過ぎなかったのかも知れないよ」

源七はうなずいた。

「だが、居造の方は惚れていた。だから二世を誓った中のおすみが京津屋の内儀になっても金をたからずに、盗人の頭領となって盗みをくりかえし

ていたんだらう。最初は目眩ましのつもりだった小火騒ぎが、お芳によって、押し込みに関係のない日に大火事が起こりだすと、しまいには捕り方を惑わすためにそれを利用して、わざわざ総五郎の火除菩薩に火を付けて回った。悪事を重ねるうちに、狂っちゃまったのかもしれないねえな」

「のちのちは、まとまった金子を手にして、京津屋の身代と釣り合う薬問屋でも興おこそうとしていたのかも知れないよ」

「おすみを手に入れるために？」

「そうさ。ほんと馬鹿な男だよ。でも、居造は、お芳が火を付けているのを知っていたのかね」

「おそらく知っていただろう——あるいは、あいつは、お芳に探索の手を及ばさないために、わざと、火除け菩薩のある場所に火を付けていたのかもしれないねえな」

おろくは、はっとした顔で源七を見た。

「親分は、居造が、お芳を諫いさめるために、お芳に先んじて火除け菩薩に火を付けて回ったっていうのかい」

おろくの胸に居造の気持ちが迫ってくる。

（お芳、火傷をしねえうちに、もう火付けはやめな。少なくともお前がどこに火を付けて回っているか俺は知っているぜ……）

「分からねえ。今となつては、すべては藪の中さ。ただ分かっていることは、あんたも言っていたように、総五郎は醜男だ。居造は二枚目。そしてお芳は

——

「十人並み以上に可愛かった。あんた、まさか……」

黙り込むと、火鉢の上の鉄瓶が立てる音がやけに耳に障った。

「本当のことは知らねえよ。だがそう考えれば、居造がやったことの説明は

つく」

しばらくして、おろくが言った。

「でも、どうしてお芳は火付けを繰り返したんだい。あたしにやわからないよ」

「お芳は、自分の父親が菩薩像に縛り付けられて、生きたまま、火をつけられるのを見た。そしてすべてを忘れた」

「ひどいね……」

「あまりに恐ろしいことを見聞きすると、かえって、何もかも忘れてしまうことがあるそうだ。そんな例が西洋にはあるらしい。源内先生から、そう聞いたことがある」

だが、本当に忘れたんじゃない。

傷は心に残ったまま表には現れず、お芳を一番倉に、菩薩像に惹きつける。

「そう考えたら、お芳が、総五郎が若い頃に名前を売り出すきっかけになった火除菩薩の置かれている場所を選んで火付けをしてまわった理由が分かってくるんじゃないか」

自分が作った菩薩像にくくりつけられて燃える父親。

いくら記憶がなくなっているとは言っても、その姿は、お芳の記憶の奥底に傷となって深く刻み付けられたことだろう。

その傷は、お芳の心に火を起こし痛めつける。

そして、母親が他の男と会っているのを知って、ついに閉じこめた火がお芳の心を焼き尽くしてしまった。

燃やせ、菩薩像を燃やせばお父つつあんが帰ってくる、お父つつあんに会える。お芳は、そう思ったのかも知れない。

いずれにしても、お芳は死んでいる。

もう確かめることはできないのだ。

源七の言葉に、おろくは呟くように言った。

「お芳のことを、まるで頭を火の輪に取り囲まれているようだった、と言った人がいたね」

源七はうなずいた。

「今、思うと、それは決して大げさな話じゃなかったんだね」

「火の輪か」

目を閉じた源七の頭に、青白い頬をして横たわるお芳の顔がよみがえった。

その横顔に源七は問いかけてみる。

——その火を、言蔵に止めてもらって良かったのかい

だが、お芳は何も答えない。

「子供が火に焼かれ続けるなんて、あっちゃならないことなんだ」

源七に耳に、おろくの言葉は重く響き、その後長く源七の頭から去ることはなかった。

△
了
▽

最後までお読みいただきありがとうございました。

感想などございましたら、ブログに書き込んでいただくか、以下のアドレスまでお寄せください。

e-mail:kazanari@kabulaya.com

鏑谷嘴矢